

## 水を受け継ぐ建築

聳え立つ人工物群、蓋をされ呼吸を阻まれた土壤、水路や河川へ流亡していく水。

現代の建築・都市環境の開拓によって、本来の水循環のプロセスは分断され、

地球や私たちの生活環境に大きな負荷を与え続けている。

本提案では、「大きな水循環を構成する要素」として、担うべき役割や性能を持った建築の在り方を考える。

水を禪として受け継いでいく以下の3つの建築は、この先の自然環境と人間社会が生きていけるまちの環境を手綱に構築の最初の一歩となる。

■背景：「大きな水循環とそれを阻む現代都市」

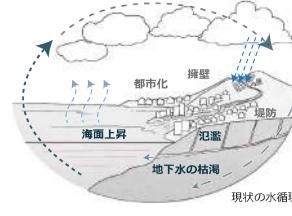
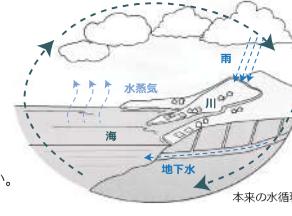
上流から下流にかけて、地上でも地下でも地続きで繋がり、

太古から現在にかけて受け継がれてきた大きな水の循環。

しかし人為的に自然を制御しようとする現代の都市開拓によって、それが阻まれた結果、土砂災害は激増の一途を辿る。土砂災害による死者数は、年々増加の一途を辿る。

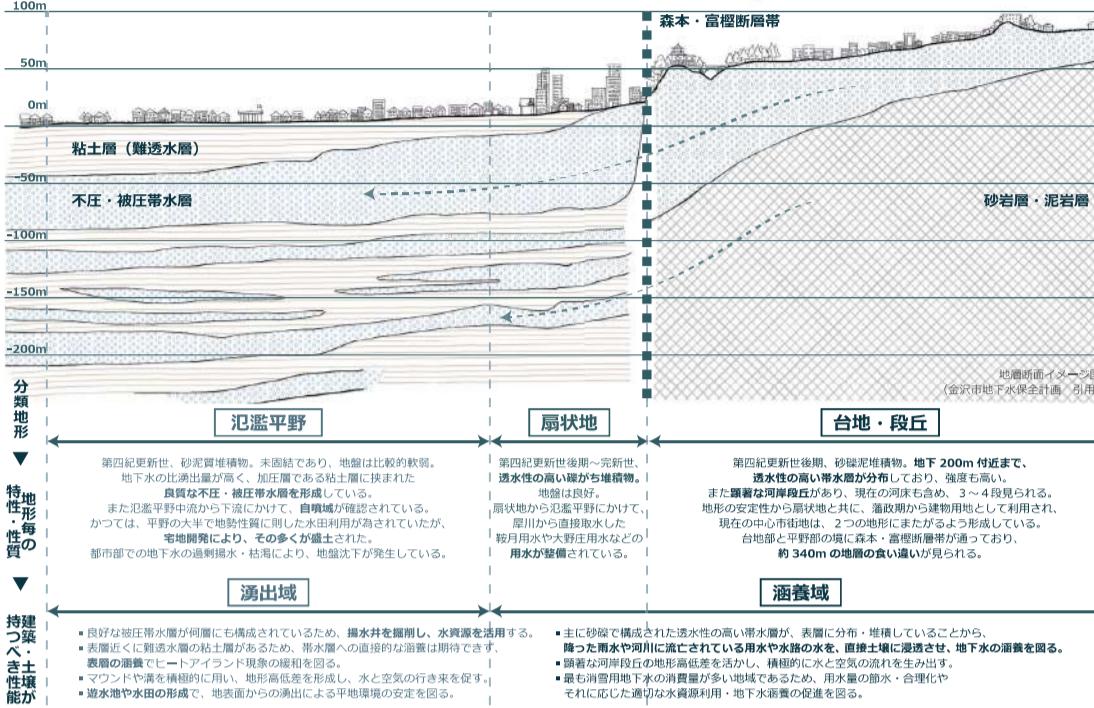
土砂災害や洪水災害、地盤沈下、ヒートアイランド現象など出口の見えない様々な環境・気候問題を急速に引き起こしている。私たちがこの生た地球上で持続的

様々な環境・気候問題を急速に引き起こしている。私たちがこの先も地球上で持続的に生活を続けていくためには、僕で当たり前に存在している水循環と向き合う必要があるのではな



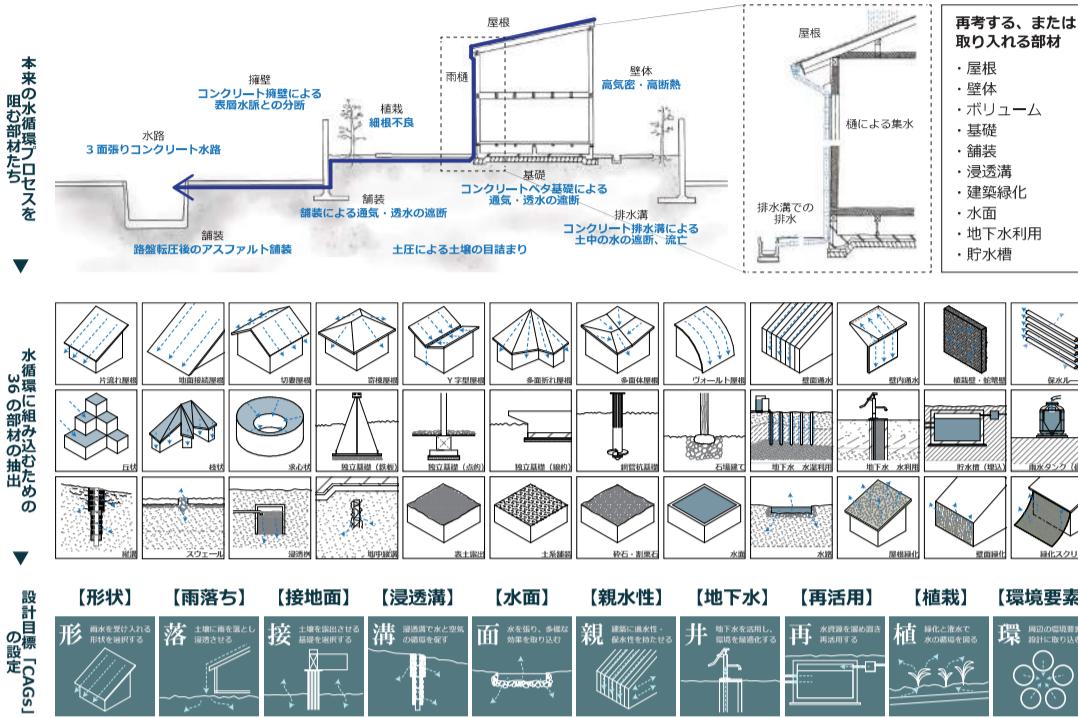
## ■敷地・調査：「金沢市犀川流域における地勢・地質情報の整理」

犀川は、金沢市内中心部の側を流れ、現在の特徴的な地勢を形成した要因である。またかつてから現在にかけて、市内の景観形成や産業、物流、歴史の発展に大きく寄与してきた河川である。水循環を構成する要素としての建築の在り方を考えるために、犀川流域内の地勢・地質を調査し、地形毎の性質や、建築やその土地が持つべき役割や性能を導出・整理し、それらの内容を建築を設計する上の前提条件とする。



## ■手法：「部材の再考」と、水循環に組み込む設計目標「CAGs」

現代都市において、降り注いだ雨水は、土壤を涵養することなく、樋や水路を通して「排水」すること前提で形作られており、結果的に土壤が硬化、不安定となり、悪循環を生み出している。これらを改善するため、建築や都市を構成する「部材」を、水循環に組み込める形へ再考する。またそれらの部材の水循環における相互的関係性を、水循環に建築を取り込むための設計目標「CAGs (Circular Architecture Goals)」と定め、その設計目標を前提に、提案を行う。



## ■提案：「地形毎に現れる建築」



## ■ 水辺平野 × 地に定着する家



地に定着する家  
断面図  
S=1:100

形 ポリューム感を抑えながら、雨水を受け入れ、池へ誘導するために、四方に片流れ屋根を掛けた。

落 傍った雨は、隣接外壁のガルバリウム鋼板のハサミによって、池に誘導され、土壌に浸透していく。

親 地下水を汲み上げ、壁内に循環させ、輻射熱熱交換を行つ。意を聞くにも、涼しいいため、外向し暮らしを促す。

面 敷地を取り込み、池を形成。水の浸透と湧出による土地の安定や気化熱熱交換をもたらす。融雪水なども利用。また緑を放ら、水質を保つ。

植 植込みで生まれた風土を、地の周りに配置。屋根樹脂瓦を種類別、根元に配分を実現。通過気流過水脈の形成や植物の養分供給を促す。

溝 成人周りに浸透溝を形成。水や空気の循環、木の根の通路との絡み合いを図る。また大雨の際は、オーバーフローした水は、溝に排出され、土壌に直接浸透される。

接 鉄筋地盤であるため、深度10m付近までを打ち込み、基礎とする。同時に壁面を開放することなく、開放することが可能に。

井 池の水は、深度200mmの自噴層から取水。また壁内を循環する地下水を活用する。

